

「自分」という日常臨床語について

— 類縁概念との比較を通じて —

時岡 良太

1. 「自分」という日常臨床語

「日常臨床語」とは、心理臨床において用いられる日常語のことである（北山, 2006）。日常語は、その意味が曖昧になりがちであるため、厳密性を要求する科学的な議論にはあまり用いられない。しかし、心理臨床学的な議論においては、日常語がしばしば登場する。北山（1993）は、精神分析がもともと日常語で発想されたことを指摘し、臨床的な議論においても日常語を用いることの重要性を述べている。たとえば、精神分析を創始した Freud による「自我」という概念は、もともとドイツ語では“*Ich*”であり、「私」に当たる日常語を用いて名づけられている。日本語で「自我」というと、非常に抽象的な心理学的概念のように聞こえるが、元はとても身近な日常語を用いて概念化されたものなのである。

そして、日本における心理臨床において重要な意味を持つ日常語の一つが、「自分」である。心理臨床におけるやりとりには、「自分」がしばしば登場する（森岡, 2012; 北山, 1993 など）。それはクライアント自身の言葉として、あるいはセラピストの言葉として心理臨床場面に現れる。また、クライアントのあり方や面接過程全体の理解のために、「自分がない」「自分を作っていく」など、「自分」という言葉をキーワードとして理解がすすめられていく場合もしばしば見受けられる。しかし、日常語であるがゆえにその使われ方は人によって様々であり、ある程度の曖昧さを残しつつ文脈に応じて用いられていると言える。一方、先に述べた Freud の“*Ich*”もそうであるし、他に“*self*”などの「自分」に近い概念も、元々は日常的な言葉であるが、心理臨床実践に関わる研究の中で、明確な概念として記述される試みがなされてきた。それと同じように、「自分」についても、心理臨床の中で用いられる場合の意味について検討することには意義があると思われる。よって本稿では、「自分」という日常臨床語について、辞書的な意味や先行研究を踏まえた上で、欧米起源の類似の諸概念と比較しつつ、その臨床的な意味を探っていくこととする。ただし、これは「自分」という言葉を新たな心理学的概念として定義づけようとする試みではない。日常臨床語について多くの研究を行っている北山（1993）も、「自分」についての様々な意味を挙げた上で、そうした意味で「自分」を理解することを教科書的に提唱しているわけではないと述べ、臨床実践においては、「患者と治療者とが実現する治療の場において、患者の表現する言葉の、患者にとっての意味を探し続けることがやはり必要」と述べている。本稿は、そのようなその人なりの「自分」の意味を探し続ける際に役立つものとなる

ことを目指すものである。また、心理臨床場面においてクライアントとセラピストのやりとりの中で用いられる場合にしても、クライアントを理解するための言葉として用いられる場合にしても、「自分」という言葉の意味を深く問い直すことで、その言葉を使用した本人自身も意識しなかった意味を知り、新たな気づきが生じたり、事例への理解が一層深まったりする可能性もある。「自分」は心理臨床において用いられやすい言葉であるだけに、何気なく使われたその意味を立ち止まって改めて考えることが、臨床実践において重要な意義を持つであろう。

2. 「自分」に関する先行研究

辞書の意味

まず、「自分」という言葉について、辞書の意味を確認しておきたい。『日本国語大辞典 第二版』では、一つ目に「(反射指示) その人自身。自己。自身。」、二つ目に「自称。わたくし。」、三つ目に「対称。『御自分』『御自分様』の形で用いられた。」とある。このように「自分」はその人自身という意味や、一人称、あるいは時には二人称としても用いられる言葉であり、そのこと自体が、日本人における自他の曖昧さを示しているものと言えよう。また、『日本語源広辞典 [増補版]』には、語源として「自(おのれ) 十分(身分)」と記述されている。英訳される場合には、『新和英大辞典』では「1. [その人自身] self; oneself; one's self 2. [私] I; me」とされている。しかし「自分」は容易に欧米語になりにくいことが指摘されており(土居, 2005)、溝上(1999)は(自)己にはselfを、(自)我にはego, I, meをあてるとする一方で、「自分」には人間関係の上下の意識が込められており、それは欧米語には基本的にないものであると述べている。このように、「自分」は一般的にselfやIといった言葉で訳される言葉であるが、「分」ということが言葉の成り立ちに含まれている点が欧米語とは異なる点であり、自らの存在が成立する際に「分」ということを前提としていることが表れているものと考えられる。「分」という字の成り立ちについては、『新潮日本語漢字辞典』によると、会意文字で、「八+刀」であり、刀でものを二つに分ける意を表す。意味としては、立場や身分の他に、分離に関するもの(分かれる・部分・区分など)、識別に関するもの(分かる・分別など)、与えられたもの(天分・取り分など)、などがある。

また、木村(1983)も指摘しているように、「自分」という言葉は「自分が」「自分で」などのように、助詞をつけることで「みずから」という意味を含みこんで用いられることが多い。他にも、『日本国語大辞典 第二版』によると、「自分と」という言葉は「ひとりでに。自然に。」という意味と、「自分みずから。自分自身で。」という意味を持っている。木村(1983)は、「自」という言葉には「おのずから」と「みずから」という、主体の能動性において一見正反対に見える意味が同時に存在することを指摘し、『『自』がもともと『主体』と『客体』の『あいだ』にあったもの』であり、それが主体の経験によって分かれ、「みずから」あるいは「おのずから」の意味になると述べている。それと同様に、「自分」という言葉も、助詞がつくことによって「ひとりでに」という、あるがままに任せるような態度を表す意味と「みずから」という主体的・能動的な態度を表す意味の両方を持ちうるものであり、そのことはわれわれにとっての「自分」が、主客未分の性質を持ったものとしても捉えられていることを表していると考えられる。

「自分」に関する先行研究

心理臨床の文脈において、「自分」について詳細に扱った研究の端緒は、土居（1960）であろう。土居（1960）は、神経症患者の治療経過において、「今まで自分がなかった」という意識があらわれ、それが治療の一転機になることに着目し、『『自分』の意識を、分離された存在としての自己の表象を持つことであると定義する』と述べている。またそれに関連して、『『自分がある』状態はいわば成熟した自我意識』であるとし、通常青年期に起こる自我確立の現象ときわめて類似していると述べている。そして、こうした「自分」の意識を「甘え」との関連で論じ、「甘え」を十分に意識し、それを克服することによって「自分」の意識が芽生える、としている。また土居（1971）は、「個人が集団の中にすっかり埋没」している場合、もしくは「集団と対立する自己を主張しない」場合、「自分がない」と言え、「集団所属によって否定されることのない自己の独立を保持できる時」、「自分がある」と言われると述べている。さらに、所属する集団を失い、全く孤立してしまう場合にも、「自分がない」という意識が生まれるという。そして、「以上のべたことを、いいかえて、人間はかつて甘えるということを経験しなければ、自分を持つことができない、といってもよい」（土居、1971）としている。つまり、土居における「自分」は、他者や集団に対して「甘える」ことができる経験を前提に、そのことを自覚した上で、分離・独立することのできる存在である。

土居の「自分」に対して北山（1993）は、「私の観察では、自分というのは表象というより、外的な環境の中に『自分らの分』という居場所をえた、より具体的で社会的な広がりである」と述べている。北山（1993）は「自分」を「自らの分」と分解してとらえ、「日本語の『自分』とは、人生という生き方の歴史的積み重ねの延長上で、自分という領土、つまり自らの『分』をえて中身を抱えながら、現在も生きているこの生き方の主体のことをさす」「『分』とは、分け与えられた分であり、地位や身分というような社会的な意識につながる」としている。また、英語の self や ego と比較して、それらには自己中心性の意味が含まれるが、『『自分』はいつも状況や他者との関係のなかにある』とし、さらに「こういう『自分』で肯定的に意味されるのは中心性、利己性というよりも、むしろ『自分なりの』『自分らしい』『自分流』というときに際立つ独自の具体的な在り方という側面なのである」という。北山にとっての「自分」とは、その人の環境の中での「居場所」としての意味と、その人の独自で具体的な「中身」としての意味の、両方を持つ言葉なのである。ここで「中身」とは、北山（1993）によると、知識、幻想、空想などによる充実や、身体体験に根差した情緒や欲望などであり、そうした内的体験が、自分という感覚の基盤を作るといふ。

また木村（1983）は、「自分がなくなった」という離人症患者の言葉を出発点として、「自分ということ」について考察を展開している。木村によれば、「自分がない」とか「自分がある」として言われる「自分」とは、第三者的な視点から見た、対象としての、「自分というもの」という名詞的なものではなく、「自分ということ」という、副詞的なあり方であるという。そして、「自己」とか「自分」とか*¹は、「根源的な生命の躍動の一側面」であり、それが自身の存在のもとへと「分有」されているという実感が、「自分がある」ということなのである。さらに、西洋において「エゴ」や「セルフ」という場合には、個人の内面に存在するものとして、「内面性」や「内面性」が想定されるが、日本人にとっての「自分」とはそのような内部的なもので

はなく、「私が『自分』であるということにおいて、私はつねに私個人から『外』へ出て、世界との『あいだ』に立っている」(木村, 1983)と述べられている。木村の述べる「自分」は、名詞的なものではないという意味で、土居のように「自己の表象」としてのものではない。独立した自己の表象を持つというのは、「成熟した自我意識」が必要であり、自分で自分を見つめる、内省的意識が前提とされている。その意味で、木村に従えば、土居の「自分」は、西洋的なものと言えるだろう。一方木村の場合、自身の存在の根拠として、根源的な生命的躍動を「分有」しているということがあり、それが表現された言葉として、「自分」をとらえていると言える。

ここまでの「自分」に関する議論をまとめると、土居の「自分」は、「甘え」の経験を前提にした、そこからの分離・独立ということが強調されており、北山においては環境から分け与えられた「居場所」という意味と、それを前提にしたその人なりの独自性ということであった。さらに木村においては、まず「根源的な生命の躍動」があり、それを「分有」しているということが「自分」ということであった。このように「自分」には、おのれの存在よりも大きな存在がまずあり、そこから分け与えられて存在しているという意識と、そのことから生じる社会的な存在としての意識、さらにそれを前提としながらも、分離・独立し、独自性を持つという個別性を持つ存在としての意味とが含まれていると考えられる。

3. 類縁概念との比較

ここでは、「自分」との関連度が高いと思われる、心理臨床に関わる概念を取り上げ、「自分」との比較を試みる。

心理学における「自我」と「自己」

心理学では一般的に、James (1892) の「知者 (I)」と「被知者 (me)」を受けて、前者を自我、後者を自己とする定義がよく用いられている。しかし溝上 (1999) は、「心理学では、自我や自己の概念定義が混乱している。今や、このことは常識といえる。」と述べ、まずは文法的に検討した上で、2つの概念の相違について、欧米語と日本語の違いを踏まえて論じている。そこではまず、英語における I, me, self の相違について検討されている。文法的には、I は主格の人称代名詞であり (“ego” はラテン語で、英語の I にあたる言葉であるから、それらは代替可能である)、me は目的格の人称代名詞である。そしてこれらは、「他者やモノとの関係性を抜きには存在しない」ものであり、なんらかの行為が生じるときにはじめて、主体と客体が生じる。そして self は人称代名詞ではなく、「他の誰でもない私自身」という自他分別を強調するために用いられるという。そこで溝上 (1999) は、self を「自他分別を前提とする心的な生の経験体」と定義している。さらに、日本語との対応については、漢字の語源をもとに、「己」は self と対応し、「我」は ego, I, me に相当するとしている。ただし、「我」は単独で格を示すことができないために、主格 (ego もしくは I) なのか目的格 (me) なのかは文脈で判断しなければならない。そのため、今田寛による James (1892) の邦訳において、「主我 (I)」「客我 (me)」とされているのは妥当であると述べられている。以上の検討から溝上 (1999) は、「行為主体を『自我 (ego)』、自他分別的な経験体を『自己 (self)』、知られる客語としての『私』を『客我 (me)』として用いる」としている。

溝上（1999）は、「自分」には欧米語には基本的でない要素が含まれるために、「I や me, self」の対応を考える場所から除外して論をすすめた」としているが、「自分」は心理学における「自我」や「客我」、「自己」とどのような関係を持っているのであろうか。日本語では、助詞によって格を区別するため、「自分は」「自分が」とした場合にはIに相当し、「自分に」「自分を」などとすれば me に相当する。また、「自分で～する」のような言い方では、他の誰でもなく自分自身が、みずから、という意味になり、これは self に相当する。このように、主体であるか客体であるか、あるいは自他分別ということを示す場合、欧米語においては言葉自体が変化するのに対し、日本語では言葉自体は変化しないということ自体が、日本人における存在のあり方が、主と客、自と他をはっきりと区別していないということの表れだと考えることもできよう。また、「自分」との違いが表れているのは“self”であろう。2 節において考察したように、「自分」にはおのれの存在の前提により大きな存在がある一方、self は「自他分別を前提とする」言葉であり、個人と個人の違いが前提にあるようである。こうした人の存在のあり方の違いについては、文化心理学における「文化的自己観」との関連を指摘できる。Markus & Kitayama（1991）は、西洋においては自己（self）が他者（others）と分離していることを前提とする「相互独立的自己観」が優勢であり、東洋においては、自己と他者が結びついていることを前提とする「相互協調的自己観」が優勢であると述べているが、そのような存在の基本的なあり方の違いが、言葉の成り立ちからも読み取れるのである。以上のことから、「自分」は助詞次第で「自我」や「客我」と同じ役割を果たすことはできるが、自と他に関する存在の根本的な在り方の東洋と西洋の違いを反映して、「自分」と「自己」には本質的な違いが見受けられると言える。

精神分析（自我心理学）における自我と自己

Freud による「自我」の概念は非常に有名だが、それが彼の心的構造論における機関の一つとして描かれたのは、『自我とエス』（1923）であった。小此木（2002）によると、『自我とエス』以前には、自我は「他の人々から区別される身体をも含めた一個の全体としての『自己』」という意味と、「特有な属性と機能によって特徴づけられる心の力域ないし構造」という意味の二通りの意味で漠然と用いられていたという。このことに関連して Federn（1953）は、自我は主体であると同時に客体であり、そのような独特なパラドックスこそが自我の本質であると述べている。

Hartmann（1950）は、このような Freud の「自我」が、非常に曖昧に用いられていることを指摘した。そして自我について、「人格」や「個人」と呼ばれるものと同じものではなく、さらに体験における「客体」の反対概念としての「主体」でもなく、単なる「意識」や「感情」でもないとし、「それは、人格の下部構造であり、その諸機能によって定義づけられる」と述べ、様々な機能を司る機関として自我を特徴づけた。さらに彼は、「自己（その人自身の人格）」と「自我（心的システム）」が対概念として用いられていることがしばしばあるが、それらは本来対概念ではなく、「自己」の対概念となるべきものは「対象」であるということを指摘し、ナルシズムにおいてリビドーが備給されるのは自我ではなく自己であり、「対象表象」の反対語として「自己表象」という用語を提唱した。このような議論の中で Hartmann（1950）は、「自我」「自己」「自己表象」を区別した。

以上のように、精神分析においては Freud によって「自我」の概念が提唱されたが、はじめ

は曖昧に用いられていた。その曖昧さは、既に述べたように“Ich”という日常語を用いて名付けられたということと無関係ではないと思われる。曖昧さを生んでいた、「他の人々から区別される身体をも含めた一個の全体としての『自己』」という意味（小此木, 2002）は、一人称代名詞として使われる“ich”の本来の意味に近く、心の構造における機関の一つを指す言葉としてよりも、理解しやすいものだったのではないだろうか。しかし、科学的な議論では厳密な定義を持った概念が要求されるため、「自我」からそのような曖昧な意味は外され、純粋に精神的な機能を司る機関の名前として定義づけられたのである。そして、曖昧さの解消のためにもう一方の意味には「自己」が当てられ、「自己表象」といった様々な概念もそこから発展していった。

これを「自分」との関連で見ると、まず「自分」には「自我」のように、心のメカニズムにおける一機関というような科学的に洗練された意味は全くないように思える。どちらかと言えば、「その人自身」を漠然と表しているような「自己」に近いであろう。しかし、「自分がない」と言った場合、自我機能の失調状態を表すこともある。土居（1960）は、統合失調症における自我障害について、「自分を意識しながら『自分がない』こと」に、その体験の特徴があると述べ、自我障害は『『自分』の意識を形成せんと欲して形成し得ない状態である』としている。また、時岡（2012）は「自分がない」という体験、およびその言葉のイメージについて自由記述を求める調査を行ったが、記述の中には「自分の感情を感じられない」「茫然自失」「自分の行動をコントロールできない」などの、自我の基本的な機能が失調している状態を表すものも見られた。こうした機能と、精神分析における自我の機能とは必ずしも重ならない部分もあると思われるが、ここで表れているのは、しっかりと心的機能を働かせている存在としての「自分」である。その意味では、「分」の意味の内、「分別」があるという意味が含まれていると理解することもできよう。このように、「自分」という日常語からは「自我」のような機能的側面の意味は中々出てこないが、「自分がない」とすると、そのような意味が実は含まれていたということに気づく。北山（1993）も、『『自分がない』とは言いが、『自分がある』とはあまり言わない』と述べているが、「自分」についての検討においては、それが普段意識されにくいために、「自分がない」状態になって初めて意識される部分があることも考慮すべきであろう。

Jung の「自己」

Jung は、はじめ Freud と蜜月関係にあったが、後に訣別し、独自の「分析心理学」を創始した。分析心理学においては「自己 (Selbst, self)」という概念が非常に重要な役割を果たしており、精神分析における「自己」とは異なる、独自の概念として理論的に発展してきている。Jung（1928）は、「意識と無意識とは、必ずしも互いに対立するのではなく、むしろ互いに補いあってひとつの全体、すなわち自己を形づくる」「自己とは、意識的自我より上に位する大きさをもつことになる。それは、意識的心だけではなく、無意識的心をも包括し、それゆえ、われわれもまたそうであるような一個の人格ということができる」（傍点原訳書）と述べている。また Jung（1928）は別の箇所でも、自己は「認識不可能の存在を表現するための構成概念である」とし、「われわれの全精神生活は、まさにこの一点に解きかたいすべての端緒を発しているかに見える、あらゆる最高かつ究極の目標も、ひたすらこの一点をめざしているように思われる」としている。こうした Jung による「自己」に対して Jacoby（1985）は、「自己という言葉が、人格の全体性を意味しているのか、明確な心的プロセスが『組織化』されてくる単なる中心を意味

しているのか」が曖昧であると指摘している。また Samuels (1985) も、自己には「中心であると同時に全体性である」という「二重の定義」があるが、そのことを Jung 自身、自信を持って主張しているという。

河合 (1967) によると、Jung の自己の概念は、東洋思想の影響を受けており、Jung の自己について、「東洋と西洋の思想の橋渡しとして、このユングの考えが大きい役割を果たすものと思われる」と述べているが、「自分」という言葉で表される日本的な存在のあり方には、特に上述の木村敏の考えに従うと、Jung の「自己」をめぐる考え方との共通性が見られる。Jung (1951) は自己と自我との関係について、全体と部分の関係であると述べているが、このような構造は木村 (1983) の言う「根源的生命」と、その「分有」としての「自分」との関係と類似している。さらに、「部分」や「分有」と言っても、静的なものではなく、ともに動的なプロセスであるとともに、「自己」が神のイメージで象徴される (Jung, 1951) ように、上位に位置するものは、両者ともに絶対的な存在であり、さらにそれ自身は不可知なものである。ただし、木村の「根源的生命」は、内部的なものではなく、個別性を超えた相にあり、それを「分有」しているという実感が、「自分ということ」であるとされるが、Jung の自己の場合、神のイメージのように自身の存在の上に位置する絶対的な者として、個を超えた存在として表れてくるという面を持つ一方で、「われわれの内なる神」(Jung, 1928) というように、内的探究を深めていく中で見いだされるものとも言える。以上のことから、やはり河合 (1967) の言うように Jung の自己は、「東洋と西洋の思想の橋渡し」的な概念であると言えるのではないだろうか。

Kohut の「自己」

精神分析家の Kohut は、「自己」を中心に据え、独自の「自己心理学」を提唱した。Kohut ははじめ、伝統的な精神分析的理論の枠組みの中で、「自己は精神分析状況で現れてくるし、精神装置の内容として、比較的低い水準の、つまり比較的体験に近い、精神分析的抽象物という様式で、概念化される。このように自己は精神の一つの審級ではなく、精神の内部の構造なのである」と自己を定義していた (Kohut, 1971)。しかし後にこれを「狭義の自己」とし、自己心理学の展開の中でその定義は放棄された (丸田, 1992)。そして Kohut (1977) は新たに自己を「個人の心理的世界の中心」(広義の自己)として、「その本質において不可知である」「抽象的科学の概念ではなく、経験的データから引き出された一般化である」と述べている。こうした記述から丸田 (1992) は、Kohut における「自己」は「I」(私)に近い」と指摘している。

このような Kohut の「自己」について、丸田 (1992) によると、その臨床的な定義は「理論的構築の基礎として使うにはあまりに曖昧」であり、それを明確に定義し直したのが Stolorow である。Stolorow (1987) は、Kohut の自己心理学における「自己」の概念の不明確さは「自己という用語を、心理的構造 (体験のオーガナイゼーション) と実存的発動者 agent (行為を始める人) の両方の意味で使ってきたこと」にあると指摘している。そして、前者の意味を持つのが「自己」という概念であり、後者を「人 person (共感的・内省的検索領域の外にあり、還元不能な存在論的構成概念)」と呼んで、それらを明確に区別した。

また、Kohut (1977) は自己について、「その本質において不可知である。われわれは内省と共感によって自己そのものを貫くことはできない。内省的にあるいは共感的に知覚される自己の心理的表現のみがわれわれに開かれているのである」と述べているが、これに対して Jacoby

(1985) は、「このような自己に対するコフートの理解が、ユングの考えときわめて近いことは明らかである」と述べている。

このような Kohut の「自己」について和田 (2002) は、「自分」に似ていると述べている。Kohut は「自己」という概念を抽象的な概念として厳密に定義するよりも、体験に近いものだという点を強調していることから、実践的な概念として、自己 (self) という日常語のニュアンスを生かそうとしていたのではないだろうか。そのことが、「自分」という日常語に近いという印象を与えたと考えることもできよう。ただし、Kohut はそのように「自己」を不可知で体験的なものとしつつも、「広義の自己」を「個人の心理的世界の中心」と述べているように、あくまで「個人」の内にあるものとして捉えていたものと考えられる。一方で、Jung の「自己」との比較の際に既に述べたように、「自分」とは個性を超えた相にある「根源的生命」の「分有」であるという点において、大きな違いが認められると言えよう。Jung や Kohut が、不可知な全体性ということを考えつつも、“self” という、自他分別を前提とした「おのれ自身」を指す言葉を用いたのも、根本的な前提として、やはり個性があるということを表しているように思われる。

Sullivan の「自己」

「精神医学とは対人関係の学である」という言葉で有名な、精神科医の Sullivan も、自身の臨床実践に基づき、独自の「自己」論を展開している。まず、彼の考え方の基本にあるのは、「とにかく一個の人格を、その人がその中で生きそこに存在の根をもっているところの対人関係複合体から切り離すことは、絶対にできない」(Sullivan, 1953a 傍点原訳書) という認識にある。Sullivan の人格発達論では、幼児期後期において、「自己組織 self-system」(あるいは、自己態勢 self-dynamism) という「体験組織体」が現れる。これは、周囲の重要な人物(主に母親)との対人関係の中から生じてくるものであり、不安を回避するように機能する。そして、重要人物からの承認、不承認に関するものに注意を絞る、それ以外の部分に目が向くことを妨げるという、「顕微鏡に似た働き」(これを「選択的非注意」と呼ぶ)をするようになる(Sullivan, 1953a; 1953b)。また、Sullivan は人格を「自己」(覚醒している、完全に能動的な部分)と、「人格残余部」(直ちには意識に到達できない部分)に分けて考えており、本人にとって強い不安を引き起こすものは、人格残余部に「解離」されるという(Sullivan, 1956; 中井, 1975)。

このような「自己」にまつわる理論化の中で、「自己」や「自己組織」、「自己態勢」といった類似の概念が登場するが、これら3つの語は、Sullivan 自身の理論の推敲の過程で生じてきたものであり、同一の意味を持っていると解してよい(Chapman, A. H. & Chapman, M. C. M. S., 1980; Mullahy, 1953)。つまり、Sullivan における「自己」とは、対人関係と切り離すことができないことを前提としつつ、まずは人格を構成する構造のひとつであり、さらに、「選択的非注意」や「解離」を用いて人格全体を守ろうとする、特定の働きを担う主体としても描かれているのである。対人関係と密接につながったものとしてとらえているという点では、「自分」のあり方に通じる所がある。ただ、Sullivan の「自己」は、その発生や発達に常に対人関係の中にあるが、あくまで「自己組織」という閉じた構造が考えられているという点では、そもそもの存在が、木村(1983)の言う世界との「あいだ」にあるような、「自分」のあり方とは異なるとも言えるだろう。

Erikson の「アイデンティティ」

「アイデンティティ」という言葉は、いまや一般的に用いられている言葉であるが、元々は精神分析家の Erikson によって提唱された用語である。アイデンティティに関して Erikson (1959) は、次のように述べている。「自我アイデンティティとは、その主観的側面においては、以下の事実の自覚を意味する。一つは、自我を統合する秩序として自己斉一性と連続性があるという事実の自覚。もう一つは、自我を統合する秩序が効果的に働くのは、他者に対して自分自身の持つ意味が斉一性と連続性を保証されている場合であるという事実の自覚である。」つまり、アイデンティティとは自らの存在が変わらずにあるということと、時間的な一貫性を持っているということであり、それに加えて、そうした事実が他者に対して保証されている、つまり社会的な承認を受けているということが重要なのである。

このアイデンティティに関して 鐘 (1990) は、一般向けの『アイデンティティの心理学』において、「アイデンティティとは、『自分』ということについての意識やその内容をさしている」と述べている。また、Erikson の述べる、青年期において複数の同一化からアイデンティティを形成していくプロセスを指して『自分』で『自分』をつくっていきこうとするころの動き」と表している。他に、アイデンティティと「自分」の関連について土居 (2005) は、『自分』という言葉に『分』が入っていることが暗示するように、『自分』はいつも相手に対しての自分である」とした上で、Erikson のアイデンティティでも常に相手が意識されているという点から、「自分」は「Erikson の研究で有名になった identity (同一性) に相当する」と述べている。英語の “identity” も、英語圏ではかなり日常的な言葉であるというが (北山, 1993)、そうすると同じ日常語である「自分」と置き換えることは不自然なことではない。一般的には、identity が日本語訳される場合、「同一性」あるいは、そのままカタカナで「アイデンティティ」とされる場合が多い。他には、場合によって「主体性」「自己定義」「自己限定」「存在証明」など、いろいろな言葉があてられている (遠藤, 1981)。このような日本語も、もちろん間違いというわけではないが、非常に多義的で曖昧とも言われているアイデンティティという概念のうち、部分的な性質を言い表すにとどまっていると言える。一方「自分」は、すでに述べたように「自 (おのれ) + 分 (身分)」であり、おのれ自身という側面と、社会的な存在としての側面とを曖昧に含みこんだ言葉として、“identity” と非常に近いニュアンスを持っているのではないかと考えられる。

日常的な言葉を概念化すること

ここまで見てきたように、欧米語としては日常的な “ego” “self” “identity” といった言葉が心理学的に概念化されてきており、それらが日本に入ってきたときには、「自我」「自己」「同一性」などと、非日常語として訳されてきた。そして、もともとの概念は提唱者自身の定義の曖昧さが指摘され、後継者たちによって概念定義の精緻化が試みられてきているものが多い。これは、日本語訳だけを見ている限りでは、はじめ曖昧であった概念が洗練されていく過程のようにも見えるかもしれないが、原語としてその概念を扱っている側からすれば、そもそも日常語を用いて特定のことがらが名付けられたこと自体、その言葉の曖昧さを見込んで、それでも適すると考えられたためではないだろうか。特に、心理臨床に関わる学問においては、理論は常に実践との関わりの中で生まれてくる。心理臨床実践において、言語的交流が生じる場合、

当然のこととして、日常語が用いられることとなる。そこでは理論的な厳密性ではなく、主観的な意味や、そこに付随する情緒的体験が重要となる。そうした実践を学問として記述する場合には、どうしても精緻な概念が必要であるが、実践とのつながりを踏まえれば、多義性や曖昧さも重要であるとも言えよう。そうしたアンビバレンスの中で、心理臨床的な概念が発展していくものと思われるが、そのような概念が日本語訳されて紹介される場合、もともと日常語であるがゆえの豊かさのニュアンスが伝わらず、概念の、悪い意味での曖昧さだけが感じられてしまう可能性があることに注意する必要があるだろう。

4. 「自分」という言葉の心理臨床における意味

ここまでの考察から、「自分」について様々な意味が見出された。それらを欧米起源の既存の概念と比較すると、共通するものが多く見られた。しかし、根本的な次元においては、「自分」には西洋的概念には見いだされない、独自の要素を持っていることが示された。それは、西洋の概念、特に「自己」の場合、「自分」と似たような構造を持つものとして概念化される場合もあるが、やはり根本的には個別性が前提となっていると考えられるのに対し、「自分」の場合、個別性を超えた相にある、大いなる存在（木村の言う「根源的生命」にあたるもの）を前提とし、その「分有」としてひとりひとりの「自分」があるとする点である。そのような、存在のあり方における外部性が、根本的な次元における、「自分」の独自の特徴なのである。そしてそれゆえに、「自分」という言葉には自他の区別が曖昧で、主客が未分化な性質があると考えられる。その一方で、「自分」の「分」には「分離」という意味もあり、土居における「自分」のように、分離・独立した存在を表すものとして「自分」が使われることもある。独自の存在としての意味を持ちながらも、根源的な次元における自他や主客の曖昧さを同時に表すということが、「自分」の特徴であると言える。

このような「自分」の性質は、心理臨床においてどのように作用しているのだろうか。例えば1対1の心理療法において、クライアントが「自分」を一人称として用いた場合、もちろん表面的な意味としては「私が」あるいは「私自身が」という意味となるが、「身分」の「分」を考えると、それは他者との関係性を前提とした「私」ということが言外に前提となっているのかもしれないし、根源的な自他・主客の曖昧さを考えるならば、深い次元ではセラピストとつながっていて、「私」のことでありながらも「あなた」のことであるという表現なのかもしれない。また、セラピストがクライアントに対して、その心の動きについて言及する場面を考えてみると、セラピストが「あなたは…」と言う場合には、二者の区別が明確になるが、「自分は…」などの形で言う場合には、クライアントのことを言いつつも、セラピストのことでもあるかのような、二者の区別が曖昧で、底の方でつながっているような感覚を含んだ表現になる。このように、何気なく使われる「自分」という言葉について思いをめぐらすことは、クライアント自身のあり方だけでなく、セラピストとの関係のあり方についても理解する一助になりうるものと考えられる。

註

- *1 木村 (1983) においては、「自己」「自分」「私」は並列的に用いられており、それらが意味的に区別して用いられてはいない。しかし、「分有」ということを手がかりにそれらのあり方について論じているため、本論での「自分」についての考察との関連は非常に大きいと考えられる。

引用文献

- Chapman, A. H. & Chapman, M. C. M. S. (1980). *Harry Stack Sullivan's concepts of personality development and psychiatric illness*. New York: BRUNNER/MAZEL. 山中康裕(監修)武野俊弥・皆藤章(訳)(1994). サリヴァン入門 その人格発達理論と疾病論. 岩崎学術出版社.
- 土居健郎 (1960). 「自分」と「甘え」の精神病理. 精神神経学雑誌, 62 (1), 149-162.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造. 弘文堂.
- 土居健郎 (2005). 『「自分」と「甘え」の精神病理』再論. 精神神経学雑誌, 107 (4), 301-306.
- 遠藤辰雄 (1981). 人生周期と同一性. 遠藤辰雄(編). アイデンティティの心理学. ナカニシヤ出版.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton & Company. 西平直・中島由恵(訳)(2011). アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.
- Federn, P. (1953). *Ego psychology and the psychoses*. London: Imago Publishing.
- Freud, S. (1923). Das Ich und das Es. 道籐泰三(訳)(2007). 自我とエス. フロイト全集 18, pp.1-62. 岩波書店.
- Hartmann, H. (1950). Comments on the Psychoanalytic Theory of the Ego. In: *Essays on Ego Psychology*. New York: International Universities Press, 1964 pp. 99-141.
- Jacoby, M. (1985). *Individuation und Narzissmus : Psychologie des selbst bei C.G.Jung und H.Kohut*. Pfeiffer. 山中康裕(監修)高石浩一(訳). 個性化とナルシズム—ユングとコフートの自己の心理学. 創元社.
- James, W. (1892). *Psychology, briefer course*. London : Macmillan. 今田寛(訳).(1992). 心理学(上). 岩波書店.
- Jung, C. G. (1928). *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewuften*. Darmstadt: Reichl. 松代洋一・渡辺学(訳).(1984). 自我と無意識. 思索社.
- Jung, C. G. (1951). *Aion*. Zürich, Rascher. 野田倬(訳).(1990). アイオーン. 人文書院.
- 河合隼雄 (1967). ユング心理学入門. 培風館.
- 木村敏 (1983). 自分ということ. 第三文明社.
- 北山修 (1993). 自分と居場所. 岩崎学術出版社.
- 北山修 (2006). はじめに. 北山修(監修)妙木浩之(編). 日常臨床語辞典. 誠信書房.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self: A systematic approach to the psychoanalytic treatment of*

- narcissistic personality disorders. New York: International Universities Press. 水野信義・笠原嘉 (監訳). (1994). 自己の分析 みすず書房.
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. Madison, Connecticut: International Universities Press. 本城秀次・笠原嘉 (監訳). (1995). 自己の修復 みすず書房.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 丸田俊彦 (1992). コフト理論とその周辺 自己心理学をめぐって 岩崎学術出版社.
- 増井金典 (2012). 日本語源広辞典 [増補版]. ミネルヴァ書房.
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム. 金子書房.
- 森岡正芳 (2012). 心理療法・精神分析における自己論の流れ. 梶田叡一・溝上慎一 (編). 自己の心理学を学ぶ人のために. 世界思想社.
- Mullahy, P. (1953). A theory of Interpersonal Relations and the Evolution of Personality. In: Sullivan, H. S., & Mullahy, P. *Conceptions of Modern Psychiatry: The First William Alanson White Memorial Lectures*. New York: Norton. 中井久夫・山口隆 (共訳). (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房.
- 中井久夫 (1975). サリヴァンの分裂病論. 中井久夫著作集 精神医学の経験 2 巻治療 岩崎学術出版社 (1985). pp. 338-358.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001). 日本国語大辞典 第二版 第六巻. 小学館.
- 小此木啓吾 (2002). 現代の精神分析 フロイトからフロイト以後へ. 講談社.
- Samuels, A. (1985). Jung and the post-Jungians. Routledge & Kegan Paul. 村本詔司・村本邦子 (訳). (1990). ユングとポスト・ユングアン. 創元社.
- 新潮社 (編) (2007). 新潮日本語漢字辞典. 新潮社.
- Stolorow, R. D. (1987). Reflections on Self Psychology. In: Atwood, G., Brandchaft, B., & Stolorow, R. D. (1987). *Psychoanalytic treatment: An intersubjective approach*. The Analytic Press. 丸田俊彦 (訳). (1995). 間主観的アプローチ コフトの自己心理学を超えて 岩崎学術出版社.
- Sullivan, H. S. (1953a). Basic Conceptions. In: Sullivan, H. S., & Mullahy, P. (1953). *Conceptions of Modern Psychiatry: The First William Alanson White Memorial Lectures*. New York: Norton. 中井久夫・山口隆 (共訳). (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房.
- Sullivan, H. S. (1953b). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鐘幹一郎 (共訳). (1990). 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 鐘幹一郎 (1990). アイデンティティの心理学. 講談社.
- 時岡良太 (2012). 「自分がない」という言葉が表すもの. 平成23年度京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未公開).
- 和田秀樹 (2002). 壊れた心をどう治すか コフト心理学入門Ⅱ. PHP 研究所.
- 渡邊敏郎, Skrzypczak, E. R., Snowden, P. (編). (2003). 新和英大辞典. 研究社.

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2014年9月1日、改稿 2014年11月20日、受理 2014年12月26日)

「自分」という日常臨床語について

—類縁概念との比較を通じて—

時岡 良太

心理臨床において、「自分」という日常語はよく用いられる。本稿では、「自分」の持つ意味について、心理臨床的な検討を行った。辞書的な意味と先行研究の検討から、「自分」について以下のことが示された。(1) 自他・主客の区別の曖昧さが表れている(2) おのれの存在よりも大きな存在がまずあり、そこから分け与えられた存在としての意味を持つ(3) 常に他者との関係の中にある存在としての意味を持つ。さらに、これらの意味を前提としながらも、(4) 集団から分離・独立し、独自性を持つ存在として意味を持っていることが分かった。次に、西洋起源の概念である「自我」、「自己」、「アイデンティティ」との比較を行った。「自分」とこれらの概念は共通する要素が多いことが示されたが、根本的な次元においては、西洋の概念では存在の個性が前提としてある一方、「自分」は個性を超えた存在を前提とするものであるという点において、「自分」の独自性が見出された。

On the Daily Word “Jibun (Self),” Which Is Often Used in the Practice of Clinical Psychology: Comparison with Similar Concepts

TOKIOKA Ryota

The Japanese daily word “jibun” is often used in the practice of clinical psychology. This study was performed to discuss the meaning of “jibun” in the context of clinical psychology. Discussion of lexical meanings, the origin of the word, and previous studies revealed that (1) it represents vagueness about distinction between self and others, or subject and object, (2) it means a being as distribution of the great being that precedes ourselves (3) it means a being that is always in an interpersonal relationship. Furthermore, while presupposing these meanings, (4) it means a being that has individuality and is independent of the group to which the person belongs. Next, “jibun” is compared with the Western clinical psychological concepts, “ego,” “self,” and “identity.” These concepts and “jibun” have much in common. On the other hand, the uniqueness of “jibun” is that it is preceded by the being transcending individuality, while the Western conceptions presuppose individuality.

キーワード：「自分」、自我、自己、アイデンティティ

Keywords: “Jibun”, Ego, Self, Identity

